

その他

渡部律子名誉教授オーラルヒストリー

—ソーシャルワーク研究と教育の道のり：

1980年代・留学と博士号取得—¹

岩永 理恵, 渡部 律子, 太田 聡子, 辻村 あずさ

The Oral History of Professor Emeritus Ritsuko Watanabe Becoming a
Researcher and University Professor:

1980s, Graduate School Experience in The University of Michigan Joint Ph.D. Program

Rie IWANAGA, Ritsuko WATANABE, Tomiko OTA, Azusa TSUJIMURA

要約：渡部律子先生に研究と実践のあゆみを伺ったオーラルヒストリー報告。第2回目である。留学先ミシガン大では、実習生も尊重され、スーパービジョンが充実していた。当時の研究・実習で出会った先生の多くが、今も尊敬できるロールモデルである。修士での研鑽の結果、博士課程進学の話が出て、勧められるままSWと文化人類学とのジョイントコースに進んだが、元々興味があった心理学副専攻へコースを変えた。ここでの学びで得たものは、①研究テーマを見つける困難さ、②研究は回り道も必要、③独自の研究スタイル構築には、論理的な論文構成法を学ぶ、即ちモデルを持ちその模倣をする、④複数視点の理解に概念図が有効、⑤現実的な到達点を見極める、である。博士論文の計画書（プロポーザル）、博士學位論文、学術投稿論文の各々の執筆の困難さに加えて、恩師のリサーチアシスタントを行うことで、米国での助成金獲得の厳しさと研究スケールの大きさを知った。

キーワード：オーラルヒストリー、ソーシャルワーク研究、ミシガン大学スクールオブソーシャルワーク

【実習・職場での学び】

（1982年夏～83年12月までのミシガン大学スクール・オブ・ソーシャルワーク修士課程での）実習では、すごく鍛えられました。頭を使って実践を言語化してクライアントの支援をする集中トレーニングでした。この時、「私はこれを探してたんだ。このために留学してきたのだ」と嬉しくなりました。実践では複数モデルをクライアントのニーズに合わせて組み合わせて使うことを教え

てもらいました。アセスメントの重要性、ピアグループ・スーパービジョンの有効性も学ばせてもらいました。実習先では、毎週ピアグループ・スーパービジョンがあって、実習生でもそこに参加させてもらいます。Walk inと呼ぶ初回面談の人たちが来ます。するとまずチームミーティングで、「あなたのアセスメントは？どれぐらいの期間かかって何をゴールにできるの？そのためにはどんなアプローチをするの？」というやりとり

を、15分ぐらいでスピーディーに進めていくのですね。最初の頃は、何も言えない私でした。でもこのようなやりとりを繰り返しているうちに、「支援の早い段階できっちりと見極め（アセスメント）をする。でもそれだからといって、その人に寄り添うことを忘れずに支援する」という訓練をしてもらえたと思います。

実習生のときは、もちろんクライアントの許可を取って、毎週面接を録音させてもらいました。逐語録も書き、毎週スーパーバイザーに渡しました。スーパーバイザーはその記録にきっちりとコメントをしてくれると同時に、様々な質問をしてくれます。バイザーである私はそれに関するフィードバックをします。そうそう、ついこの間、そのスーパーバイザーとメールでやり取りしたのですが、ご自身も大学の授業を持っていらっしゃるって、「リツコとのスーパービジョン経験のエピソードを、バイザーがいかに大事かを教える資料として授業で使わせてもらっているのよ」って言ってくださいました。今でも私が尊敬し続ける、ロールモデルになっているスーパーバイザーです。当時そのバイザーから学んだことは、スーパービジョンで重要な「関係性」でした。彼女はすごく私を“尊重してくれた”んですね。“民主的な関係だけど、厳しいこともちゃんとやってくれる”んですよ。私がピア・スーパービジョンで全然しゃべれなくて、黙っていたら「リツコ、あなた、みんなに馬鹿だと思われてるよ。私はそうでない事を知っているけれど、自分の考えを口に出さなければ、みんなに馬鹿だと思われるんだから、喋りなさい」と、ちゃんと言ってくれました。

担当したケースにおいても、私が自分に素直になることの意味を、彼女と一緒に学ぶことができました。この時、担当したのが、虐待を受けて成長してきた若い女性で、その記憶が再燃したため、鬱状態が続いていました。彼女がその相談面接の中で記憶をたどりながら辛い経験を話してく

れました。すごく、すごく辛い経験でした。でも、ごく平板な口調で喋るのですね。こんな口調でこの事を喋れるって…。私は聞いているだけで、すごく動揺しました。私は実は心のどこかで、平板に喋ってくれてありがとう、と思っていたのです。その時のやりとりをある意味、「流した」のです。でも、その面接を逐語録にして渡したら、そのスーパーバイザーにきっちり気付かれました。「あなた、何で、ここでこのまま流したの？」と尋ねられました。バイザーには、丸わかりだったのです。「彼女も感情を平板にしていたし…」と答えると「それだけではないよね？」と聞かれ、「私、あの時このままお互いに感情を表出しないで行けばありがたいと思いました」と答えました。ワーカーが間違ったときはクライアントにちゃんと謝らなければならない、ということも、この時にしっかり学びました。次の面接で、私はクライアントに「ごめんなさい」って謝りました。「この間、あなたがああいう経験を話してくれたのに、私はそれに対してきちんと応答できなかった。あなたがどれだけ苦しかったか、怖かったか、この一週間考えました。きっと、私もそのことに触れるのが怖くて何も表現できなかったのだと思います」と言いました。そして「あなたは何を考えながら、あんなことを話してくれたのか、教えてくれますか」と聞いたら、彼女はすごい感情を表出してくれました。これは決していつでもどこでも通用することではなく、危険も伴うことなのですが、その時は、私自身が覚悟を決めていた。そして、その妥当性を認めてくれていたからこそできたのです。私の問いに対してクライアントは「実は私はネガティブな感情は全部抑え込んで生活している」って言ったんです。「あの時のことを誰にも言うてはいけなかった」と負の感情を表現したのです。本当にもうドラマチックなのですが、これをきっかけに彼女の状況は、好転

し、それから何回かで支援は終了しました。

専門職の連携のやり方も学びました。嘱託の精神科医がいたのですけども、担当クライアントに関して、服薬していた人なんですけど、一ソーシャルワーカーの私に「君の診断は？」と尋ねてきて、「何を聞くのでしょうか、この方は」と思っていたら、「どんなお薬が最適だと君は考えるの」とさらに意見を求めてきました。ソーシャルワーカーもしっかりと知識を持っていなければいけない。持ってれば、医師は対等にやり取りをしてくれるようだと思って、びっくりしました。また、ここでの経験で学んだことは、様々なスタンスで支援に向かう人々がいる、ということです。同じ相談員として、いろんな領域の人がいました。臨床心理士も一緒に働きます。教育カウンセラーは教育領域でカウンセリング資格をとった人です。牧会カウンセラー、教会でカウンセリングをする人ですね。これで博士を取った人、それから精神科の看護師さんで相談員を主にやる人、それからソーシャルワーカー、みんなが一緒に働いて、同じチームで仕事するんです。各々の人たちが、それぞれ大事にしている理論のバックグラウンドが違います。もうそれは面白かったです。実存主義の人もいたので、「ええ、そんな風に解釈するのだ」って刺激的でした。

他機関に紹介する際には、しっかりと紹介状を書きます。「かくかくしかじかの理由・目的のために、あなたのところにクライアントに行って頂きます。ついてはこれだけの情報を提供します」とクライアントの前で本人の同意を得て書きます。必要ならクライアントがいるところですぐ電話もします。「これでいいですか？」って聞いて、「じゃあ紹介します、これから私がこういう内容をしゃべります」と了解を取って電話をします。このようにしていくことが相互信頼につながるということが分かりました。

【尊敬できる、ロールモデルになる先生たちとの出会い】

尊敬できる教員たちの出会いが、私の教え方、生き方のロールモデルになりました。ミシガンの先生たちは、ひょっとしたらソーシャルワーク教育に非常にラディカルだったかもしれません。「あなたたちは誰のためにどのような仕事をするのですか。金持ちを対象にした個人開業ワーカーを育てるために、私たちはいるんじゃない」って明確に言明する先生もいました。ただし、ミシガン大学は卒後に個人開業する学生の率がすごく高かったです。でもこのような考え＝ミッションは徹底的に教えられました。これは、私が求めていたソーシャルワーク実践だって思い、すごくワクワクしました。

さらに教えてもらったことは、アセスメントの大切さです。ゴールを作ってそのゴールはクライアントと共有すること。この共有というところの理解では、日本で学んだロジャリアンのバックグラウンドも役立ちました。具体的にどんなことを学ぶことができたかという、ミクロだけでなく、メゾ・マクロからも仕事を検証する作業です。

私の副専攻は経営管理だったんですが、経営管理の視点から私の仕事を見ると、実は中身が何も見えない。だから、組織への貢献がない限り、私なんていつクビ切られても仕方がないんだ。極端に言えば、ソーシャルワーカーは内向きにだけ仕事をしてはいけけないのだということも学びました。

ソーシャルワークの本質を見失ってはいけない、単に綺麗事だけ言っていてはいけない。このことを叩き込まれました。今記憶に深く刻まれていることは、「クライアントの靴に足を入れなさい」ということですね。つまり、エンパシー、共感性を持って、ということです。「あなたたちはどれだけ頑張ったって、クライアントと同じ体験は

できない。だからこそ、それを自覚して理解を深める最大限の努力をなさい」ということでした。また、「自分とクライアントの間に、あるパワーの差を自覚して影響力を少しでも減らす努力をなさい。対等の関係なんて、最初からあるなんて甘いことを思っ^{ちから}てはいけません」というメッセージも何度も聞きました。本当にその通りです。ワーカーが力を持っているのです。提供するサービスと、それを決定する権限、専門知識を持っています。ああ、本当に綺麗事じゃないと思いました。だから私も「対等な関係」という言葉を使いはしますが、最初から出来るはずないし、対等の関係だなんて思っ^{ちから}てはいけ^{ちから}ないと考えています。

それから、クライアントの持つ社会経済の環境やその文化特有の行動様式を学ぶ姿勢を教えられました。「中流の生活をしている君たちにとってひどいと思える行動が、その人たちにとっては普通の事があるんだ。だから文化を学びなさい」とすごく言われました。社会経済階層、土地風土、住んでいる場所柄の文化等です。

それから「自分が辛いから、またクライアントにとって一時的には辛いからといって、真実から目をそむけて、苦しいことつらい作業を避けてはいけ^{ちから}ない」と言われました。直面すべき時には、ちゃんと現実^{ちから}に直面する confrontation です。これらをしっかりと教えてもらいました。

ソーシャルワークのゴールと文化の関係に目を向けることも教えられました。家族療法を、あのアン・ハートマン²から学びました。「機能不全家族」の説明を聞いていたら、日本の家族はみんな機能不全に見えてしまいました。その時、文化が家族の機能をすごく規定することを理解しました。このことが後々、文化が相談支援のアプローチに及ぼす影響に関心を持ったことにつながっています。それから根柢を持った実践をしな^{ちから}ければいけ^{ちから}ないように、理論を柔軟に応用することって

いうことは、授業ですごく強調されたのですね。大学院の課題として、実践と理論をいかに結びつけるかということがしょっちゅう問われました。

少し話は変わりますが、この当時、日本の大学の先生がよくミシガン大学にお越しになったのでその方々と知り合う機会を持ち、帰国後、私と、日本の福祉の世界を繋いでいただくことができました。

3. 博士課程：1984年から1990年

【文化人類学とソーシャルワークのジョイント、博士課程への進学から進路変更】

ここから、博士課程でのお話です。1984年に博士課程に進みます。本当は修士だけで、帰ってこようと思っ^{ちから}ていたんですが、まあ紆余曲折がありまして、アメリカにもうちょっと残ることになりました。落ち込みながら、泣きながら、一生懸命修士課程で学んでいるうちに、A+などの成績をいただけることも出てきました。すると、先生方が、「あなた大学院の博士課程に行かない？」って勧めてくださるようになりました。その時は「文化人類学とソーシャルワークのジョイント・プログラムに入りなさい」と助言されたのです。私も調子に乗って「そうですよね、文化とソーシャルワークに関心もありますし」って言って、文化人類学とソーシャルワークのジョイント・プログラムの博士コースに入ったんですが、しばらくして「ちょっと待って、違うかもしれない」ということが分かり始めました。

なぜかという^{ちから}と、文化人類学というのは、本当に孤独な作業なんですね。フィールドに行っ^{ちから}て、そこで長いこと参与観察をして長い時間をかけて論文を書く。フィールドに行くときも最初から理論を持って行っ^{ちから}てはいけ^{ちから}ないと言われました。本当はそうでもないらしいのですが、一応そのように言われます。ですから方法論とかあんまり教えてくれなかったのです。そんな時に、社会学や心

理学とソーシャルワークのジョイント・プログラムにいる人たちは「私ね、〇〇研究に先生と一緒に行くために今アンケート作っているの」とか「〇〇に行って調査してくる」と聞いて、すごく羨ましくなりました。そこで、私もそうやって学びたい、と考えて自分の指導教授であるラパポート先生という、文化人類学会の会長か何かされていた重鎮のところへ行っただけです。その時は「ラパポート先生のフィールドに私も連れて行ってもらおう」みたいな思いをもっていました。そこで「先生、心理学でも、社会学でも、みんな先生について研究を始めています。私も勉強したいので、夏休みに何か宿題ください」って言ったんですね。そしたらもう、今も忘れもしない言葉、「リッコ、文化人類学者は孤独だ」と一言。要は、1人で頑張りなさい、とということです。その時、「私は何のために博士課程に来たのかな」と思っていました。

そこで、もともと好きだった心理学を副専攻にしたいと考え、大学院の博士課程のディレクターのところに行きます。その先生がのちの私の博士論文の主査になってくださった、シーラ・フェルド先生でした。すごく厳しい先生で、「私はあなたの言う事は信じない」と言われたのです。「そんなに簡単に音を上げるような人は、心理学に行ったらちゃんと出来るなんて思えない。本当に移りたいならば、もう一回全部やり直し。まずは、文化人類学でいい成績取りなさい。取ったら、心理学に移ることを考えましょう。まずそれが可能かどうかを見極めるために、後期には心理学の学部の授業を取りなさい」と言われました。とにかくフェルド先生と約束したことを実行して心理学に移りました。

【心理学研究科に移り、博士課程で学んだこと】

やっと心理学専攻に移れました。この出来事で同期生より一年遅れをとります。ここからは、博

士課程でどんなことを学んだかお話しします。要約すると5つあります。

一つ目は「研究したいテーマを見つけることの難しさ」。今日ここにいらっしゃる皆さんは大学院を経ていらっしゃるのです、お分かりだと思います。自分が単に知りたいとか、関心があるよって言うことと、研究として成立することは違う。私は、文化とソーシャルワークに興味があったんですが、本を読んだら自分で知りたいことは、そこそこ、答えが出たんですね。けれども研究をどのように展開するのかと聞かれた時に、研究方法をきちんと考え出すことができなかつたんです。もっと賢かったらできたかもわかりません。しかし、当時の私には無理でした。文化とソーシャルワークの関係性というテーマは、自分が最初から結論を持っていて、それをその通りだ、と確かめたかったんだ、っていうのが見えました。この両者については、地道に努力を継続する事の意味、回り道は必要だよってということも学びました。この「回り道は必要」が二つ目です。博士論文を書くために、自分のテーマに関して少なくとも現存する全ての論文は網羅して検索しました。当時は今のように綺麗にデータベース化されておらず、図書館でパッと開けたものに良いものがあったりもしたので、結局、文献検索だけで拾ってくるものだけでは不十分だなんて学びました。実際に足を運んでみつけられるものがある、ということです。ソーシャルワーク abstract だけに頼るのではなくて、他にもいろんなものが見つかるようになり、そこに有益な資料もありました。

それから、3つ目ですが、「自分の研究スタイルを作るためには、しっかりと論理的な論文構成法を学ばなければならないこと、スタイルを作り上げるためにモデルを持ちそのモデルの模倣をすること」の大切さを知りました。論文のスタイルについては、日本で TOEFL 予備校に行った際に少し学びはしましたが、文献のまとめ方とか、文

章の書き方とあって、英語で書く訳ですから、全然わからなかったんです。そこで、スタイルを身に着けるためにたくさん論文を読んで、その要約をしました。この論文の要約の書き方については、大学院で皆さんにも紹介し、宿題にもしましたね。ゴールは何か、そのために使う方法は何か、といったことです。皆さんには日本語でまとめていただきましたが、私はそれを英語で、ノートを作っていました。先行研究レビューも、人によってタイプは違うんですが、ポイントは何かをまとめ、必要なところは論文をそのまま書き写してモデルにしました。優れたものだと思った論文からは多くを学びました。テンプレートも自分で作りました。博士論文の先行研究として300本ぐらい論文を読んだんです。重箱の隅をつつくような研究テーマで書かれたものを読んで、「つまらない」と思ったこともありましたが、その中に、おそらく3本ぐらい、もうすごい光る論文があって、その結果、わかったのは、「質的論文も極めれば量的論文に匹敵するほど一般化することができる結論が導ける。量的論文も、極めれば質的論文に迫ることができるぐらい詳細な具体性を提供することができる」でした。これは、わたしにとって、大きな財産になっています。

4つ目は、複数の視点があるため、「概念図を作って考えなければならない」ということです。これ、実は私が日本での教育で、本当に学ばなかったなと思ったことです。さきほど、臨床に関してお話ししたのですが、事例でも研究テーマでも、同じ事象も違った視点からとらえることによって、幾通りも解釈ができるんですね。つまり、研究者として、少なくとも、“自分は一体どんな視点からこの物事を見ているのか、他にどんな視点があるのか”つまり、臨床での「立ち位置」の見極めです。自分がどんな立ち位置から利用者の課題を考えているのかを明確にして問題に取り組むことがとても大切です。研究結果なんてね、時

にすごく当たり前のことであったりしますよね。でも、様々な視点を持っていけば、例えば「○○の見地からいけば、このようなことを見なければいけなかった」とか、「違った研究方法であれば出てきた結果も違うかもしれない」と、自分の研究結果をしっかりと再度論じることができます。そうなれば、自分はできなくても、続く研究者が、じゃあ私それしようってなります。研究は、他者に貢献するものでなければならぬのです。

概念図、コンセプチュアルマップ、をじっくりと、作成してから論文を書くことが大切です。大学院の授業の時に皆さんにもお伝えしたと思います。例えば私は配偶者喪失をテーマにしたんですが、配偶者喪失をし、その後ウェルビーイングが上がる人と、下がる人がいます。では、そこに与えている要因はなんだと思うか、ということを追求するためには、先行研究を読みとくのですね。そうすることによって、ウェルビーイングに影響する可能性のある要因を複数抽出することができるんです。まず先行研究をしっかりと読んで、「これとこれ」が関係してるかもしれない、っていう概念図を作っておく。それができればアンケートを作るときにもそこに入れ込む質問（つまり変数）に取りこぼしがない。インタビューする時にも、もちろん、100%完璧にはできなくても、しっかり概念図を作成しておけば、インタビューでもそのことを質問に入れられ、さらに探求質問もできます。アンケートやインタビューでなぜミスが起こるかという、ちゃんと先行研究をしないままアンケートを作ったり、インタビューに行ったりしてしまうからではないでしょうか。だから、調査が終わってから、「あら他の人がもうそっくりな調査をしていた」とか、「大事なことを聞き忘れていた」となります。

5つ目は、「現実的な到達点」も明確にしておくことです。この話はこのあと詳しく話しますので、ここではポイントを挙げるだけにします。

【博士論文作成までの道のり：博士論文の計画書＝プロポーザルとは】

アメリカでの博士論文のプロポーザルの作成プロセスを申し上げます。“ちゃんと先行研究して、そこからだいたい何が見えてきてきたかを示す。私の概念図はこれです。したがって、こういうアンケート調査をするつもりで、そこにはこういう項目を入れるつもりです”ということを確認します。そこまで出来てなかったら博士論文のプロポーザルは受け入れてもらえないんです。博士候補生(Ph.D. Candidate)にはしてくれない。だから、アメリカで博士候補生っていうのは一応、博士論文を書ける準備が充分できている、ことを意味します。

論文作成では、“高いゴールを設定し、粘り強く校正を重ねるけども、現実的な到達点もちゃんと作っておくことが大事だよ”っていうことも教えてもらいました。さっきお話をした、すごく怖かった博士課程のディレクター、シーラ・フェルド先生のもとで、私は博士論文を書くことになりました。フェルド先生は、最初の3ヶ月ぐらい私の学力を信じていなかったそうです。文化人類学をやめて心理学に移ったという経緯がありますから・・・「本当に信じられるかな」って、ずっと思っていたらしいです。でも、私が一生懸命付いていったので、途中から宗旨替えをして、先生も私を信頼してくださるようになりました。今でも本当に尊敬する大好きな大好きな先生です。“信頼は獲得しなければいけない”っていうことを学びました。自分を誰かに信頼して欲しいと思ったら、自分がそれを成果で、誠意をもって見せること、仕事で見せること、だと感じました。

この経験は、スーパービジョンのバイザー・バイザー関係でもよく言わせていただくんです。スーパーバイザーが、どれほど素晴らしかったって、スーパー・バイザーがそこにしっかりと関わる姿勢を見せなかったらスーパービジョンは成立

しません。研究も一緒だと思いました。

フェルド先生のところで、リサーチアシスタントをしたのです。傍らでフェルド先生の研究プロセスを見て感心しました。「これだけ偉い先生でも、これだけたくさん本を新たに探して読み、学び直すんだ」ということです。私のリサーチアシスタントとしての役割は、当時は、今のように簡単に文献を集められないので、“このテーマの文献をコピーしてきて”って頼まれた文献を探すため、図書館に行って文献を探してコピーして持って帰ってくることでした。そして、それらの文献をいくつかまとめて先生に報告します。それで、先生が「これは使える、使えない」って言って決めて、ご自分がきちんと読む文献を決められるのです。そして、そこから議論をする。その時に「こんな凄い先生でも、また一から全部論文読んでいる」って本当に驚きました。この時は、ワインガーデン先生っていう若手の先生とフェルド先生が、億という助成金が出るNIMH(米国国立衛生機関)のリサーチ計画書を書いていらっしゃいました。どれだけ緻密に先行研究をし、そこから概念図を作り上げてパイロットスタディをし、計画書を作成するのか、を目のあたりにします。このようなすごいプロポーザルを出して、初めて審査の対象になるんですね。でも、私の目から見れば凄かったのに「一応合格すれすれ、再度挑戦を」という判定だったんです。私は先生に付いていた期間に、研究者としてのあるべき姿を学びました。

後々私が書いた修士論文の一部に相当する論文に、このときに先生方がパイロットスタディに使用されたナショナル・データセットを使ったんですね。フェルド先生にはいろいろ指導をしていたので、共著として学術誌に投稿することにしました。「フェルド先生、私の主査なので、共著者になってください」ってお願いしたら、他の先生だったら、「そのまま出してもいいよ」だっ

たのに、フェルド先生は「私が名前を連ねるんだったら、もう一回、全部文献研究を見直しましょう」っておっしゃって、全部文献研究を書き直したんです。いっぱい新しい文献もはいる、20回以上先生と校正を重ねました。同級生たちは、「リッコとシーラの投稿論文はいつまでも続く、エンドレスペーパーだ」ってからかわれていたんです。みんな、フェルド先生がどれだけ厳しいか知っていたし、私もこの当時、今もかもしれませんが、しつこい人間だったので、きっと終わらないと思われていたようです。とは言え、投稿ですのでエンドレスとはいかないのですが、私も「ひょっとしたら、もうこれ出せないのかな?」と思ったら、フェルド先生がある日「enough is enough (もう充分なことしました)」と宣言してくれたんです。つまり、これが先ほど述べた5番目のポイントを学んだ経験です。できる限りの努力をし、追求するが、現実的なゴールは持って、ある時点では完成させる、ということでした。これが私の初めての英語での査読論文になりました。共著論文です。もちろんはじめは、すごい厳しい査読結果が来ました。でも、諦めてはいけないというのを教えてもらいました。査読の一人はOKだったんですが、もう一人には、酷評されて、フェルド先生に「けちゃんけちゃんに言われたから、先生、諦めましょうか」って言ったら、「このけちゃんけちゃんの批判を1つ1つ潰して行くのが、研究者ですよ」と論されました。

学位論文は、もうすごく苦しみながら書いたので、少しお話させていただきます。博士課程では、ソーシャルワークの博士課程のコースと心理学の博士課程のコースの授業全部終わらないといけません。さらに、そこから資格試験があります。ソーシャルワークの修士論文に相当するものを、もう一回書いて、それから資格試験では実証研究の論文、つまりデータ分析ができる能力を見せる。それから文献研究、先行研究をまとめて、そ

こからまだ他の人がやっていない研究のテーマを見つけ、その研究を具体的にどう発展させるかを考える。この2つの力を試されます。つまり、この資格試験がプロポーザルを書く準備でもあります。資格試験が終われば一応、“この学生は先行研究ができるし、データも扱えるな”ってということが確認されるんですね。博士論文の前に提出した論文のいくつかでは、ここでは widows, 配偶者喪失した女性の先行研究から次なる研究テーマを導き出すことを目的にしました。他には、実証研究やデータ分析もしました。

さきほどお話したように、博士論文のためのプロポーザル(緻密な計画書)を作って、執筆を開始するのですが、その博士論文の目的は、簡単に言えば「widowers, 男性で配偶者喪失した高齢者の再婚がもたらすポジティブな効果は、どのような要因で説明できるのだろうか?」ということです。本当にデータ分析に特化した研究をしました。婚姻状況によって、一番ウェルビーイングが低いのは、男性の場合は離別、死別した男性でした。女性の場合はそうではないのですが…

私は配偶者喪失に関心があったのと、自分にとって大きな意味をもたらしてくれた理論バックグラウンドがストレスコーピング、ソーシャルサポート(社会からの支援)だったので、このようなテーマを選択したと言えます。ソーシャルサポートの最たる提供者は配偶者と言われていいます。そして、人生で一番大きなストレスと言われているのが、配偶者の死です。だから、これらを一緒にすると「配偶者喪失の研究に、ストレスコーピング、それからソーシャルサポートの理論が使える」ということは明らかでした。ですから、それらを理論的背景にし、先行研究を読みつつ、配偶者を亡くした男性が再婚したら非常にウェルビーイングが高くなると言われているその理由は何なのだろう、ということに関して、当時あった2つの対立モデル、選択モデルと言われているも

のと、ソーシャルネットワークモデル、その両方を統合したモデルが作れないだろうか、と私はとても大それたことを考えてしまいました。それを検証するために、配偶者喪失をして再婚した人を無作為抽出するなんて、一大学院生にとっては、もうすごい難しい不可能なサンプリングです。そこでアメリカにあった大きなナショナル・データセットを使用しました。ここには、今では高齢とは言えなくなりましたが、58歳から63歳の11,153人の男性サンプルが2年ごとに調査対象となっていて、このデータセットからなら充分な数の対象者を選べたんです。複数回実施されていたこのデータセットから、研究条件に当てはまるサンプルを取り出して、新たなサンプルを作り直しました。それでも最終的に配偶者喪失経験者は335人しかいませんでした。さらにこの中で、再婚した人と再婚していない人を分類して比較しました。当時の私にできる最大限の分析法である、パス解析を使って「統合モデルができないか」ということにチャレンジしたのですが、あえなく「できない」ということがわかりました。結果はさきほどお話した、ふたつのどちらのモデルも、それぞれ少しずつ妥当性はあるけれども、どちらかが完全棄却されるわけでもないということになったのです。

考察で述べたのですが、このような結果になったのは、分析に、本来入れたかったほかの変数が入れられなかったということもありました。しかし、これが2次分析の限界でした。私がデータを集めたわけではないので、そのような変数を入れることができなかったのです。元のデータが持っていた変数を作り直すことによってできる変数のみで分析することが私の限界でした。他の変数を入れて、もっと高いレベルの分析を使えば、ひょっとしたら違った結果が出たかもしれないということでしたが、ここでまた学んだことは、前々からフェルド先生に言われていたのですが、

「研究者の使命は、ひとつひとつ分からなかったことを明確にすることである。自分が試したことを、ほらね、と言って見せるためにやるのではない。残念ながら…ということを見せるのも、次の研究に役立つのである」ということです。反省はしているが、後悔はしていません、ということですよ。終了です。ありがとうございました。

【質疑応答】

対話者 A：ありがとうございます。アメリカの大学院は、実践経験がないと入れないという事は、私も良く聞くけれども、そもそも日本でこのような教育は可能なのか。日本は実践経験がないと入れない大学院のシステムじゃないから、日本では無理なのか。つまり、先生の経験が、アメリカの大学院でなくてはできなかったことなのか、日本でも可能なのか、ってことを考えたいんですね。それは、いくつかの次元の話が混ざっているので、難しいですけど。先生の今回の個人史に引きつけて言えば、アメリカでの先生方が素晴らしい先生だったってことは、もちろんあるようですが、先生ご自身も、また、私自身を振り返っても、“自分の構えが出来ている時に会うべき先生と出会わないと出会えない”ということがあってすよね。

渡部：その通りですね。でも、会うべき先生がいなければ出会えない、っていう問題もありますよね。

対話者 A：日本でソーシャルワークを教える環境として、アメリカのような環境ができないっていう問題なのか、学生の問題なのか、先生の問題なのか。もちろん全部だと思うんですけども、それが、いつも疑問で、先生のご経験でも日本に居るときは心理学を勉強されてるんですね。でも、アメリカでは、ソーシャルワークなんですよ。なんか、それがよく腑に落ちないのです。

渡部：私にはよく理解できる質問です。その答え

に関係する問いとして、「ソーシャルワーク実践にどれだけの知識や研究成果を使うのか？」ということがあります。アメリカのソーシャルワークの大学院は、実践家養成の場所です。研究者養成ではありません。これは裏返して言えば、大学院を出た専門職がきちんと尊重されて働く場所があるという、社会の受け皿ができています。日本には残念ながらほとんどありません。日本で大学院を出て、皆さんはそれだけ力をつけ賢くはなっていってほしいけれど、そこで「大学院でこういうことを学んでくれたから、それをここでこんなふうに生かしてくださいね。」とってくれる職場はほとんどないと思うんですね。日本の現場では、多くのワーカーが社会福祉制度を運用する機関に所属して、それほど専門性を求められていない気がします。一応建前としてそういわれるけれども、現実には、求められる知識およびスキルを明確にして「こういう事をこのような力を使ってチャレンジしていただきたい。あなたの知識とスキルを活かしてください」というふうな採用はしていないように思います。「こういう枠組みの中に入って来てくれ」ということです。昔からよく言われている「日本は就職ではなく就社である」というのと、似てると思うんですね。〇〇福祉、という領域で仕事をする、ということになっている。アメリカの場合も、もちろんソーシャルワークという領域の仕事をするのですが、就職面接の際、「修士課程で家族療法の基礎を学び、かつ経営管理を副専攻として来ました」と言ったら、「この組織で家族関係のスペシャリストの力を生かしてください」と言われることが多い。それがとても、大きい。だから学生さんのせいではない。構造的な違いだと思います。これは答えが出ないのかな。私ね、いつもこだわっているでしょう。ソーシャルワーカーは何をする人か？って。私がこだわりの理由は、利用者さんからどのようなことをする人だと思われているかに

よって、私達の専門職としてのイメージも作られていくんですよ。で、ここが危ういなって最近、すごく思っているんですね。Bさんはソーシャルワーカーとは何をやる人だと思われています？

対話者B：回復期リハビリテーション病院だから全員と面接してるんですけども、初回時に“ソーシャルワーカーです”っていう案内を持って説明をしています。「退院をするときに向けて、病気や障害になった時に生活で困ることをお手伝いする相談員です」というふうにお伝えはしておりますね。はい。

渡部：それを聞いて、みんな何をしてくれると想像してると思います？

対話者B：ソーシャルワーカーとか社会福祉士とは、患者さんや家族は思っていないと思います。そこまでの認識はまだ。社会的認知が低いです。まだケアマネジャーさんのほうが、一般的に分かるかもしれない。

渡部：その通り。ケアマネジャーの方が社会に浸透してますよね。

対話者A：話が逸れちゃうんですけど、今“ソーシャルワーク”って、生活困窮の領域で、社会福祉の実践家とかソーシャルワークの先生が居ないところで、ものすごくもてはやされてるんです。社会福祉学科の先生じゃない方たちがそういうふう言う時って、ソーシャルワーカーに過度な期待があるんですね。新型コロナウイルスの影響で、生活困窮者自立支援制度がすごい使われていて、窓口にすごくたくさん人が来てるわけですよ。去年、その前までの年の100倍とか、それぐらいの単位の人たち。そういう事態に遭うと結局全然ソーシャルワークなんてできないんですよ。人の量も足りないし、スキルも足りない。私が知ってるワーカーの方たちがおっしゃって、すごく象徴的だったのが、「窓口に来る人は相談なんて要らない」って。「うんうんって話なんか聴いてる場合じゃなくて、窓口に来た人はお金がほ

しい。むしろ、話なんてなんで言わなきゃいけない？という時に、じゃあソーシャルワーカーです、って言っても、僕たちは一体何ができる？何ができるんだろうっていう自問がある」と。そういう状況にあり、一方で、過度な期待のギャップに…。

渡部：話していいですか。Aさんがおっしゃったことがまさに、ソーシャルワークっていう言葉や、ソーシャルワーカーっていう言葉が都合の良いように、日本で使われていることの証明だと感じます。本来、ソーシャルワークっていうんだったら、この利用者、このクライアントに、今、必要なものは何か、を、きっちりと考えた上で、担当するソーシャルワーカーは仕事に専念するんです。その時、必ず出てくるだろう問題は、制度・政策のギャップや資源の不足なんですよ。そしたら、それをきっちりと「〇〇というサービス、資源がない限り、この人たちは救えません。ワーカーにできることは〇〇です」ということをちゃんとと言えるループが出来ていない限り、ソーシャルワークはできないです。ソーシャルワーカーの役割には、サービスと人を結びつけることがあります。ただし、結びつけた後、“この人の生活がどう変化していく可能性があるか、それは良い方向に向かうか”ということ予測できないといけないんですね。“この人はまた同じような問題にぶつかって戻ってきそうだ”と思うグループなのか、それとも“この人は次の段階に変わっていきけるのでは”と思うのか、そのような予測ができることが、本当の意味でのアセスメントなんですよ。生活困窮者自立支援制度の窓口に来た方が相談したくないっておっしゃったこと、理解できます。マズローの欲求の段階説のピラミッドを考えたら当然ですよ。私、まだそんなことなんか考える余裕がない。まず食べさせて、まず安全な家をください”ってね。でも、その“家をください”も、実際に、“こういうアパート作ったから

入れ”っていう「家」じゃないと思うんです。その辺りをきっちり研究するのが、想像力を持っている研究者のはずなんです。この領域で必要とされている支援は何なのか？限界は何なのか？この間から、「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割期待」を読んでいたのですが、もどかしく感じました。「相談」って言って上手にごまかして社会福祉士にいろんな問題を任せてしまおう、って読み取れる気がしました。そんなふうに使われるために、ソーシャルワークがあるわけではありません。

対話者A：日本が本末転倒しているのは、そのことを話す国の委員会の場所で、じゃあ何を増やしましょうっていうと、フードバンクを増やしましょうっていうんですよ。そして、「連携」という言葉がでてくることです。

渡部：連携という言葉は頻発します。でも具体的内容、実施法はちゃんと記されていない。ソーシャルワーク機能が、バラ売りされている気がします。それも実践の段階までじっくりと考えることなく。例えば、連携を取り上げると、連携する相手の専門性を見定めて、何をお願いしたいかを明確にして協働作業をする必要があります。さらに、連携した結果、何が本当に達成できたのかを確認する。それも専門職だけでやるのではなく、利用者サイドからです。このような考え方が充分ではないと思います。この間も、連携の実際例をみていて、「ゴールは専門職にとって都合の良いゴールになっている」と思ってしまいました。

生活困窮の場で仕事をしているソーシャルワーカーたちが、私たちが今一番必要なことは〇〇ですっていうのが言えない、確かにそこがまた問題なのです。

最初の質問に戻って話します。アメリカのような専門職の作り方というのは、まず専門職が社会にどう根付いているか、水準化されているか、が重要になってきます。もちろんアメリカでも、批

判されるソーシャルワーカーはいます。公的機関で働く児童虐待の領域なんかは一部すごく叩かれていたりしますしね。でもソーシャルワークが正義の味方って思っている人たちも居るし、ワーカー自身が「私達は正義の為に働く」って言うのです。日本のソーシャルワーク実践や教育に、このようなことがどれだけ真に根付いているか、が課題だと考えます。「ソーシャルワークは社会の矛盾をたくさん見る事のある専門職である。その矛盾をどうしていけばよいかを考えなければならない」っていうのが教えられてない。

対話者 A：先生、何かちょっと今のお話で気が付いたんですが、先生の世代はたぶん60年安保の次の世代ですよ。

渡部：はい。確かに時代背景はありますね。だから、社会に対してものを言うみたいなこともまだあったのです。全部いいとは思わないのですが、何て言うか、社会に問題意識を持っている時代だったのでしょうか。学生運動の名残もあったかもしれません。私はその影響も受ける尻尾の方にいる世代なので、そういうふうなことも大いにあると思います。

対話者 E：渡部先生のご専門はストレスコーピングですけど、今日お話された院生時代を振り返り、ご自身で俯瞰して省察されるとしたら、渡部律子さんのストレスコーピングのスタイルの特徴は何ですか。項目としては3つあるんじゃないかなと思って。ひとつ目は、生まれながらにして、もしくは生育歴の中でアメリカに行く前からお持ちであったもの。ふたつ目は、アメリカに行っからいろいろな困難とかチャレンジを乗り越えるために意識的に自分を変えて習得したもの。3つ目は、今振り返ると院生時代を通じて自然に身についたと思えるもの。この3つじゃないかなと思うんですが、ご自身ではいかがでしょうか？

渡部：なかなか鋭い質問とご指摘です。多分、特徴っていうのは、私が「元々、正義感が強い」っ

ていうところですよ。あと、私は、「考えることが好き」なんです。そして、間違っているかもしれないけれども「答えを見つけたい」のです。答えの出ないこといっぱいあるんですが、さっきみたいな、「答えが出なかった」っていうのも答えです。でも、「これとこれは考えた」って思えば、自分の中ではスッキリするというのはずっと持ち続けていました。いい加減にしてきたことも、たくさんあるんですが、その時にも、やっぱり考えることはやめてはいなかったの、「考えて、自分で何かの答えはそれなりに見つけていきたいという特性」は続いていたのでしょね。

もともと持っていなかったけれど変化してきたことは、私は、人に「助けて」と言えなくて、怒りの表現もなかなかできなかった。でもアメリカに行っ、それでは生きていけなかったのです。だから、新しい行動様式を身に付けました。でも、不思議なことに、日本に帰ってきたら、またそれができなくなったんですけどね。

コーピング理論を少し使って話します。ストレスコーピングって、「感情コーピング」と「問題コーピング」ってあるんですが、アメリカではどちらかと言うと「問題コーピング」をしやすいのですが、日本に戻ってきたら「感情コーピング」をかなりするようになりました。「そういうことは、なかったことにしよう」っていうのを、しばらくしてから「問題に対処する」。それも悪くないんです、その文化の土壌で柔軟に変えなければいけない。Resilience（レジリエンス＝可塑性）が大切と言いつけています。

対話者 C：私は学部の人にソーシャルワークの理論や、実践方法あるいは演習っていうのを、総合して学ぶ機会がなかったんですよ。いろんな場面で聞きかじるんだけど、聞きかじりで終わってしまった、理論同士を比べて、このケースに対してどちらがよいかなど議論したこともない。先生のお話を伺っていると、大学院の機能が

実践家養成型であるのか、そうでないのかで、もちろん分かれるとは思いますが、私のように基本的に文献研究だけをやっているものもソーシャルワークの実践理論を全然知らないままでもいいかっていう、後ろめたさがいつもあって、学部から社会福祉学科なのに、本丸がわかっていない引け目がいつもあります。教育カリキュラムの問題だから、社会福祉士の養成課程とともに見直さなければいけないものとも思うのですが、先生のお考えはいかがですか。

渡部：養成課程とも切り離した上でガラガラポンしないとできないことなのかもしれないんですけど、必要性が今どれだけあるのかということとも関係していますね。そこに言及すると、さっきの質問とかをきっかけにしたやり取りの延長の答えになるんですが、理論があんまり上手に使えていないと感じます。実践理論の応用ということをあまり重視すると、今度は、(演習あるいは実習の)現場との矛盾が生じてくるんだと推測します。だからテキストで理論の簡単な説明があるけど、じゃあどう使うのってなった時に、わかりにくいのでしょうか。みなさんは、理論をどう学び、どう応用していらっしゃるんですか？

対話者 E：私と D さんの場合、学部時代のゼミでの体験が大きかったと思います。学年は違うけど、私たち二人とも所属していたゼミではカウンセリングの色々な理論を、あなたは何論、あなたは何理論と分担して、半年かけて順番に発表したんです。私は交流分析理論の担当でした。

対話者 D：私は学習理論でした。

対話者 E：交流分析理論を図書館で勉強して、当番回にみんなの前でプレゼンして。交流分析はこういう理論で、例えばこういう事例には交流分析ではこういうふうに説明します、っていうのを、みんなでやった。これはゼミみたいな人数じゃないと出来ないかもしれません。実践に行きたい子もゼミに多かったし。ここで、ある程度、精神分

析とか、行動療法とかの理論の基本を学べたので、卒業後すごく役立ちました。自分は何理論が割と好き、馴染む、みたいなのも感じられた。

対話者 D：理論として頭でわかっていても、結局それがクライアントとのやり取りの中で言語化されて、ああ、こういうことなんだって、こう、やっぱり自分の中に落ちてこない、この理論を今自分が使えたなっていう実感は得られないんですよ。これから社会福祉士の実習生を持つことになったときに、学部で理論とかを学んできた人たちに「あ、ここか」ってわかるような見せ方をしたい、意識してしなきゃいけない、っていうのを、今日お話を聴いて強く思いました。

対話者 C：先程、医療ソーシャルワーカーの話が出たんですけど、私がよく関わる医療の場なんて、もう専門職のせめぎ合いで、スペードのエースの医師がいて、ハートのエースぐらいの看護師がいて、ランク付けしていったら、社会福祉士の専門性は、本当に軽く見られがちだし、社会福祉士自身の自己評価もいつまでたっても上がらない。ソーシャルワーカーとしての自分は、こういう切り口でクライアント、医療の場合であったら、患者にアプローチできますっていうのを打ち出せる根拠や自信があると良いなって思います。

対話者 B：私は感想を述べます。今日、先生の大学院時代の話聞いて、すごくしっくりきたのですが、私なりに解釈すると、渡部先生は日本にいた時の大学院ではアセスメントの素地とスーパービジョンを学び、アメリカでの修士時代には理論と実践を学び、博士時代には論文をしっかり学んだっていうふうに、私の中では解釈いたしました。先生は、日本の修士時代には子供の遊戯療法を学んでロジャース中心で実践したけども、系統立てて学んでいないことに、どの段階で気づいたのでしょうか。今は非常に高齢者分野にもご活躍されていていく中で領域をすごく絞ったわけじゃなくて、やっぱり実践と論文の両方やることで、すご

く活躍する場が広がり、広い視野になったんだなと改めて思いました。実践力をつけるっていうのは、先生が学んだプロセスのエッセンスが大切だになって言うふうに改めて今日思いました。だから私も大学院で学んだアセスメント、スーパービジョン理論と実践を結びつける論文を書くということが、さらに実践力をつけるために必要だになって、今日思いました。

渡部：私もそう思っています。今、実践はしていないのですが、自分が思考力を付けることによって、実践家の方のお話を聞いて、クライアント像を描くのも早くなり、かつ、仮説が後に証明されることも増えました。実践家の人たちが、スーパービジョン後に、その後の経過を報告くださる中で、私がたてた仮説が機能したことがわかることが少し増えました。ソーシャルワークのミクロ実践では、ワーカーの情緒的な側面が強調されがちですが、優れた仕事には共感力と思考力の両方が必要だということを改めて感じます。今日は、みなさんの質問のおかげで私自身が「暗黙知」を少しだけ「形式知」にできた気がします。ありがとうございました³。

註

- 1 投稿規定によって、現役院生の阿川氏・大輪氏は著者に名前を連ねることができないが、実際には共著者である。ここに記して感謝申し上げるとともにお詫びする。
- 2 Ann Hartman：エコマップをソーシャルワークの家族理解に導入した研究者。
- 3 第3回の聴き取りが継続する予定である。